

# morinosの作り方

How to make morinos

どんな場所にしたいかをたくさんの人の想いや知恵を紡いで、素直に丁寧に考えてきました。挑戦と実験を繰り返しながらつくり続けてきた morinosの軌跡。

morinosの  
つくり方

01

team  
building

## すべては、ビジョンを共有できる チームづくりからはじまった

みんなで新しい何かをつくり出すために大切なのは、立場も専門分野も異なる多様な人が垣根を超えてまざり合って、楽しく、素直に、お互いのビジョン（想い）を共有できるチームをつくること。



## 1 まざり合って ビジョンを共有すると 化学反応が起きる

morinosをつくるのに、本当にたくさんの人と一緒にあれこれ考えました。専門家や有識者だけでなく、地元の人、アカデミーの学生・卒業生、保育士さん、学校の先生、そして子どもやお母さんなど、多様な立場の人たちがまざり合い、想いを共有し合う。立場が違えば、見えてくる景色も違ってきます。その違いを楽しみながら進めていくと、予想もしなかった面白いことが起こるんです。

### 愛称も化学反応からうまれた！

「森の巣」を意味する「morinos」という愛称ですが、実は誰が言いはじめたのかわからないんです。というのも、いろんな人がまざり合ってワイワイがやがや自由に話していたら、化学反応が起きて突然ス〜ッとうまれてきて、「それだ！」「いいね！」ってできた言葉なんです。こうやって、次々に起こる化学反応により新しいワクワクする展開がうまれていきました。



森林文化アカデミー  
鈴木 知之 技術主査

## 2 同じ体験をすることで、 共通言語が生まれる

morinosチームのメンバーは、できる限りみんなで同じ体験をすることを大切にしました。同じものを見たり、体験したり、あるいは一緒に手を動かしたり、一緒に車で移動したり、「とにかく一緒に過ごして同じ体験をする」ことで、お互いの感覚まで理解し合えるような共通言語がうまれます。

一緒にこんなことをしました！

- グリーンウッドワークで morinosのツールづくり
- プロジェクトアドベンチャー（PA）でチームビルディングを体感
- 馬と森の可能性を体感（北海道・長野に視察）
- 自然学校の空間を一緒に体感（岐阜・新潟・山梨・静岡に視察）



## 3 顔を合わせてじっくり対話 それが、遠まわりな近道

いろいろな人がまざり合っているから、当然、意見が食い違ったり、伝わらなかったりします。でも共通言語があるから、そんなときはじっくり対話します。できれば会議室より、森の中とか、手を動かしながらとか、ごはんを食べながらとか。大切なのは、メールや伝言じゃなくて、本人と顔を合わせることに。関係者が全員顔を合わせることに。ビジョンを再共有できれば、チームはまるでひとつの生き物のように動きはじめます。時間はかかるけど、実はこれが目的にたどり着くためのいちばんの近道なんです。

### 将来構想を「決めない」という決断

morinos周辺の土地利用の将来構想を検討していたときのこと。「変わり続ける」「みんなでつくる」というmorinosのビジョンを真ん中に置いて、じっくり話し合ったら、将来までカチッと見据えた土地利用計画を「決めない」という斬新な考えが生まれてきました。morinosは、利用者と一緒に手を動かしながら、自分たちでつくる空間、そして変化し続ける空間なんです。

## オープン前から1年かけて プログラムを実験する

morinosの柱は、体験プログラム。

だからこそ時間も手間も人もかけて、40以上の体験プログラムを試行しました。多くの実験的なプログラムのおかげで、morinosが大切にすべきことがわかってきました。

### オープン前からはじまっている！

どんどん生み出して、どんどんやってみる。1年間かけて、「試行」というかたちで挑戦できたことは、本当によかったです。試行なのにやりすぎなのでは！？との思いもありましたが、morinosの進むべき道を内にも外にも示すことができたんじゃないかな。オープンに向けて、チームとして成長するにはとても重要な取り組みだったと思います。



森林文化アカデミー  
川尻 秀樹 課長



### 森で算数・英語

岐阜県教育委員会の自然体験講座として、県内の保育士・教員向けに、野外で体を動かしながら算数と英語を教えるプログラムを実施しました。初日は参加者が体験し、2日目は美濃加茂市の小学校で実践をしました。

実験  
point

現任教員に森や校庭で教科を教える体験をしてもらい、反応を観察した



### 保育士の卵たちの森林体験

保育士の原体験不足が幼児期の自然体験減少につながるという課題を受け、岐阜聖徳学園大学短期大学の学生5名へ1泊2日の森林体験を行いました。火起こし・焚き火料理・夜の森散歩などを体験してもらいました。

実験  
point

保育士の卵である大学生の原体験からどんな反応がうまれるかを観察した



### うま森プロジェクト1&2

木曾馬の里・中川剛さん & 木曾馬のわかな、柳沢林業&ヤマトを招いて、「森で働く馬」を体験しました。馬が力強く木を運ぶ姿を間近で体感しながら、馬がいることで人と森がぐんと近くなることを実感しました。

実験  
point

森と人をつなぐ媒体としての馬の可能性を実験・検証した



### 森のこけこっ子キャンプ

小学生向けに、にわとりやヤギなど家畜とともにある暮らしを体験する、3回連続のキャンプ。最後はお世話をしてきたニワトリの命をいただき、子どもたちはそれぞれの気持ちでニワトリの命と向き合っていました。

実験  
point

同じメンバーで連続キャンプを実施することでより深い体験を実践した



### 山之上小学校 森のじかん

山之上小学校の協力のもと、森の中で小学校のカリキュラムに連動した活動を行う実験的な取り組み。今回は1・2年生の生活科で、森の中の虫さがしと、捕まえた虫をみんなで観察する「森の動物園」を実施しました。

実験  
point

公教育のカリキュラムを森林空間でどう置き換えられるかの実験をした



### 東濃特別支援学校の森の教室

森の体験にやってきた東濃特別支援学校の中学3年生が、自分たちの学校でも森の中で自由に過ごせる場所を作りたいと考え、その想いに応えるべく、長期的な支援をはじめました。

実験  
point

支援が必要な子どもに対して、長期的な森林体験をサポートした



### 保育士のための危険予知

関市の公立保育園の保育士を対象に、野外でのリスクマネジメントを学ぶ講座を開催。70名以上が自主参加しました。危険を排除するのではなく、それを踏まえた上で、楽しく活かすことを体験してもらいました。

実験  
point

関市が自治体として「公立」保育園での自然体験を進めることを支援した



### ロゲイニング in みの

ロゲイニングとは、地図上にあるチェックポイントを制限時間内にチームで協力しながら探し出し、その合計得点で順位を競うスポーツ。今回はアカデミーの敷地だけでなく、美濃市街もエリアに含み開催しました。

実験  
point

森林体験にスポーツと観光を取り入れて、新しい分野の人と森をつないだ



### 星空ピアノ★ごる寝

ゲストは作曲家・平本正宏さん。美濃市の廃校から譲り受けたピアノをアカデミーの広場に設置し、澄みきった星空の下、寝袋に入りながら即興演奏に耳を傾けました。星空とピアノの音色が重なり、幻想的な空間でした。

実験  
point

夜の森の新しい楽しみ方として、音楽を取り入れた

なにかを思いついたとき、なにかが足りないとき、  
なにかを修理したいとき、  
自分たちでつくれるものは、自分たちでつくる。  
それも、たくさんの人を巻き込んで。



### セルフビルドがおいしい5つの理由

- 1 いちばん使いやすいものができる**  
つくるのは、その場所をいちばん使っている人。だからこそ、いちばん使いやすいようにつくることができます。
- 2 自分たちの場所になる**  
汗をかきながら、手を動かしながらつくった場所は、愛着が生まれます。そして、愛着があるからまた訪れたいくなる。
- 3 一緒につくることで、つながりも深くなる**  
一緒につくるからこそ会話が生まれ、距離も近くなります。主催者と参加者の垣根を超える関係性がうまれます。
- 4 修理もできる、セルフビルドの輪が広がる**  
自力でつくるから自力で修理できます。そのうち自分の地域でもつくりたくって、セルフビルドの輪が広がります。
- 5 予算がなくても大丈夫**  
仲間と一緒につくる過程に学びがあります。参加費を払ってでも学びたい人は、想像以上に多いんです。

## パーマカルチャーを学びながらつくる パン焼き窯とコミュニティ

みんなが集まる「おいしい」「たのしい」場所づくりとして、2日間かけて、セルフビルドでパン焼き窯（アースオーブン）をつくるワークショップを実施しました。岐阜県内のみならず、全国各地からたくさんの参加者が集まり、手を動かしながら、体験を通して素材やエネルギーのこと、パーマカルチャー（※）の理念などを学んでいました。



### パン焼き窯がつくるコミュニティ

コミュニティの場づくりに、窯ほどいい道具はないと感じています。みんなを巻き込んでの窯づくりは楽しいし、出来上がった窯は機能的でエネルギー効率も良く、おいしいものがいっぱいできる。それに窯には心臓部のような存在感があります。窯の前に材料を置いておけば、みんな生地をこねたいし、火も起こしたい。自然と子どもたちが大人にごはんをつくってくれる流れになるのは窯独特の世界ですね。



ワークショップ講師  
フィル・キャッシュマンさん

## 馬と一緒につくる森のオブジェ

長野県の柳沢林業と、そこで働く元ばんえい競馬の競走馬・ヤマトを招き、演習林からヒノキを伐採して、ヤマトに運び出してもらいました。そしてそのヒノキを使ってmorinosに飾るオブジェをつくりました。お題は「森の中にいそうな生き物」。リスや馬から森の妖精までさまざまなオブジェが完成しました。



## グリーンウッドワークで スツールづくり

morinosのチーム研修として、生木をそのまま加工するグリーンウッドワークでmorinosのスツールをつくりました。材料は、演習林に倒れていた虫食いのコナラとヒノキ。広葉樹と針葉樹では重さも削った感触も全然違います。その違いを存分に楽しみながら、2日間かけてつくったスツールは、愛着もひとしお。



（※）パーマカルチャーは、「パーマメント（永久な）」「アグリカルチャー（農業）」「カルチャー（文化）」が融合した造語。オーストラリアのビル・モリソンとデビット・ホルムグレンが構築した人間にとっての恒久的持続可能な環境を作り出すためのデザイン体系。